



楷



岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 16

1992
OCTOBER

岡山大学附属図書館の現状と課題

森岡祐二

はじめに

大学図書館の機能強化の必要性については今年7月の学術審議会の答申にも述べられていますが、今年度、クローズアップされた課題として大学図書館の自己点検、自己評価の問題があります。本学でもすでに自己評価委員会で作業が開始されているところです。

岩元前事務部長の後任として、本年4月当館事務部長を拝命しましたが、編集部からの依頼で、本号の編集テーマに上記の問題を選び、主として図書館サイドからの発言を企画したとのことで、本稿執筆の機会が与えられました。現状把握に不十分なところもあるかと思いますが、当館の現状と当面の課題を述べ、自己点検・自己評価の端緒とさせていたきたいと思います。

本学図書館では、平成元年度から『図書館概要』に整備・充実計画表を掲げ、これまで

の業務の実績と今後の課題を、一定の尺度で分析し、業務の指針を示してきています。これに基づいて、昨年度の段階で当館が直面していた主要な課題について、本誌「楷」第14号(1991年11月)で萬成館長がコメントされています。

本稿では約1年を経た現時点で、その課題についてのフォローを試み、新たにクローズアップされてきた課題についても私見を述べてみたいと思います。

1 図書館の新築

延べ面積7,413mの中央館の現在の建物はいわゆる基準面積の約1/2にすぎず、スペースが狭隘でサービス面で重大な支障をきたしており、これを打開するため「新中央図書館マスタープラン」に沿った早急な増築が急がれます。当館としても例年概算要求を行なっ



ていますが、残念ながら今年度実現のきざしすら見えていません。増加する一方の資料収蔵のためのスペース確保という問題は今や大半の国立大学附属図書館の共通のものとなりつつあり、地域あるいは全国的な視野に立った解決の方策が必要であるとの共通認識が生まれつつあります。当館の増築に関しても当面収蔵スペースの確保という伝統的要素を欠かすことができませんが、情報処理・通信技術等の目ざましい発展やメディアの多様化とそれらを反映した利用者の需要変化に対応できる施設整備に、より重点を置くべき段階に来ていると思われます。

2 サービス体制の維持・充実

今年5月からの完全週休2日制のもとで、土曜開館を中心としたサービス体制の維持の問題は、幸い本学では各方面のご理解とご協力を得て土、日曜日ともに従来どおり開館できる見通しとなりました。また夜間延長開館(週1日22時まで)も継続実施の運びとなり、年間を通じ開館時間の短縮を回避することができました。

サービス面での課題としていることに利用者案内システムの導入があります。これは要員の厳しい現状の中でサービス内容の向上を図るためパソコンによる利用者案内の自動化を目的としたもので、昨年度末にハードウェア面の整備は一まず終え、現在館員によるソフトウェアの自主開発が進行中です。

3 電算化システムとニューメディアの拡充

当館では昭和62年度に専用コンピュータを導入して以来5カ年が経過し、その間平成2年度には全学のご支援により、本体をはじめ端末装置に及ぶ相当規模のレベルアップが実現していますが、現時点では業務量の増大に見合う中央処理装置を中心としたレベルアップが必要な時期に達しています。そこで今年度、更新のための「仕様策定委員会」を発足

させ、遅くとも次年度内の実現を目途に作業に着手しました。ニューメディアに関しては、中央館及び鹿田分館(医学系複合分館)にすでに導入済みのCD-ROMの利用が急速に伸びつつあり、特にハードウェア増設については、その実現に努力が重ねられているところです。

4 池田家文庫のマイクロ化

丸善、富士フィルムをはじめとする民間会社の協力と補修面における文部省及び大学当局の絶大なご支援により、池田家文庫藩政史料のマイクロ化事業は順調に進行しており、今年度中には予定通り撮影が完了する見通しとなりました。またマイクロ化された史料をより有効に活用するため昨年度から新たに『池田家文庫総目録』の一部を改訂増補する事業がスタートし改訂増補版として「総記」編、「国事・維新」編がすでに刊行されました。現在「藩士」編の改訂増補作業が進行中であり、その完成に努めているところです。この事業は経費面では民間の全面的な支援に負うとはいえ、編集作業面では学内関係者のご指導のもと当館の責任において実施しているものです。今後ともこうしたユニークな事業を継続するためには、他の通常業務とのバランスに配慮した業務体制を確立することが大きな課題として残されています。

5 新たな課題と展望

今年度の新たな課題としてはILL(Inter Library Loan)システムへの対応があげられます。当館も4月からこのシステムに加入しサービスの迅速化に努めています。全国的システムは早くも軌道に乗りつつあるといわれますが、サービスの効率をさらに高めるためには、本学においても資料配置または学内配送システムを再検討しいわばローカル線のスピードアップを図る必要があると考えます。(もりおか・ゆうじ 附属図書館事務部長)

参考調査業務の新しい展開

—ユース アンド ユーザ インストラクションへ—

中野 美智子

はじめに

オンライン情報検索（商用データベースの代行検索）、学術情報システムのネットワークの形成とそれに伴うOPACの構築、CD-ROMの設置、ILLシステムの稼働と、岡大図書館においても、電子メディアの導入によって、参考調査業務は大きなインパクトを受け、変化してきている。

この点については、本誌『楷』で特集を企画している。No.9(1989.10)で「LAN OPAC ニューメディア」、No.12(1990.10)で「メディア アクセス レファレンス」、No.14(1991.11)で「ユーザ・インストラクション」を組んで、図書館側と研究者のコメントによって、現状と問題点、展望を探っている。1年おきの特集は、直面する現実に対してテーマを取り上げたこともあって、それ自体が参考調査業務の変化を物語っている。

そこで、ここでは担当者の立場から、岡大中央館の参考調査業務の新しい側面を、統計的なデータによって明らかにしてみたい。

業務多能化状況

現在の参考調査業務は、図示したように、オンラインから古文書まで、文献調査、利用指導、そして広報と幅広い仕事を担当しており、いわば多能化状況を呈している。

いまや、学術情報システムのネットワーク利用、OPACのオンライン端末、CD-ROMパソコンの操作は、係員には必須である。また電子メディアと情報検索に関する知識並びに操作技術も欠かせない。

一方、中央館所蔵の池田家文庫等の古文献は本学特有の学術情報源で、整理、保存、提供サービスを参考調査係が担当している。

古文献の保存と効果的利用手段の開発は、新中央図書館の8つの基本方針の一つに掲げられ（『楷』No.9「新中央図書館マスタープランの概要」）、現在、原史料の保存対策として、民活導入により池田家文庫マイクロ化事業が進められている。係員は古文書の解説を学びながら、マイクロ版池田家文庫目録の改訂増補作業にも取り組んでいる。

●参考調査業務の多能化状況（岡大中央館）

利用案内	利用指導	レファレンスツール等の整備	参考調査サービス	オンライン情報検索	池田家文庫特殊文庫	広報
施設サービス 見学	OPAC端末 CD-ROM カード目録 二次資料 リエンテーション	参考図書収集 (冊子、電子) 電子化情報 情報機器 印刷物	文献所在調査 文献書誌調査 文献照会 ネットワークの利用 地域サービス	代行検索 DIALOG JOIS	マイクロ化事業 目録改訂事業 整理 保存 閲覧 複写 レファレンス	館報 リフレッシュ 利用案内 概要 OULIS(仮称)



業務担当職員

本学図書館の職員数61人は、8学部以上の大規模大学15校の平均129人の半数にすぎない。後者には図書館組織として平均11部局図書室がある。岡大中央館の職員数は43人、サービス対象の教職員・学生は10学部、約1万6千人に及ぶ。部局図書室を置かないので、中央館に対する図書館サービスの要求は強い。職務別では、表のように、受入れと整理部門で35%、サービス部門は閲覧、参考、複写業務に30%の人員配置で、それぞれ専任の比率は40%、46%である。

国立大の60%は、参考図書コレクションの選書を主に図書館員が担当しているが、本学図書館員は残念ながらそうではない。

研究活動への対応—情報検索

中央館の商用データベース代行検索は、高度の情報検索サービスとして1980年から導入され、研究図書館機能の一端を担っている。中央館の特色は、表のように自然・医学・人社系と範囲が広く、かつ工学系の国内外のファイルの利用が60%を占めることである。CD-ROMの利用は、MEDLINEが半数を占め表のように学生の間でセルフレファレンスによる情報検索として普及し始めた。参考調査業務にはこれらCD-ROMとCCODの使い方の指導が新たに加わった。一方、代行検索サービスに対するニーズも強く、この種の業務は、検索と利用指導の2本立ての様相を呈している。

●サービス部門担当者の充実はこれから

業務	情報処理	受入	整理	閲覧	参考	複写	全般	管理	一般	その他	計
岡大中央館	2人	8	7	6	4	3	2	3	5	3	43
うち専任	2人	4	2	2	2	2	2	3	4	1	24

●自然系中心の情報検索 (DIALOG *JOIS)

順位	ファイル	件数	利用者	件数
1	CA Search	73	工	66
2	*JICST	54	教育	40
3	BIOSIS	16	農	30
4	Chem Search	13	理	26
5	MEDLINE	10	教養	16
6	*JMEDICINE	11	資生研	16
7	SCI Search	8	薬	14
8	PsycINFO	7	医	12
9	ERIC	6	経	8
10	GEOREF	5	文	7
	その他	21	その他	21
	計	235		235

●学生利用が激増—CD-ROMとCCOD

利用者	件数	うち教官	利用No.1,2タイトル
薬	234	(7)	MEDLINE CCOD
農	97	(61)	CCOD MEDLINE
教育	64	(42)	Ulrich's PLUS
理	56	(6)	CCOD
文	40	(3)	J-BISC HIASK
経済	35	(8)	HIASK J-BISC
教養	30	(28)	CCOD
法	23		HIASK
工	16	(7)	MEDLINE
その他	19	(18)	
計	614	(180)	利用延10タイトル

*統計はすべて平成3年度

授業単位の図書館ガイダンス

最近の参考調査サービスは、表のように、カウンターでの個別の利用指導が激増している。文献探索法のガイダンスは平成2年度から4月に初級、5月に上級を実施しているが、平成3年度は通算56回、参加者約800人に達し、しかも教員参加の授業単位が31組と前年の2倍となった。参加者の感想から知られるように、利用指導の教育的効果は大変高い。利用指導の内容は、OPAC、カード目録による蔵書、雑誌の検索法、CD-ROMやDBの検索法が主体であるが、図書館利用指導プログラムの計画的な実施は、今その効果を発揮しつつある。

利用指導の将来

利用指導のねらいはセルフレファレンス能力の向上にある。問題は、現在の実施体制では、二次資料の活用や、情報源の知識、探索技術を身につけるまでにはいたらないことである。アンケートでは、1、3回生が電子メディアに柔軟で、院生のほうが尻込みをしている。参加教員から、「学生のレディネスの違いがあり段階的な指導が必要である」「利用指導を授業科目に」という意見をいただいた。全国に先駆け本学において、利用教育がカリキュラムの一環として行われるのも夢ではないかもしれない。

(なかの・みちこ 参考調査係長)

●利用指導の著しい増加

1館1日	年次	レファレンス	利用指導	文献所在
大規模大	平成2	15件	18%	67%
岡大	平成1	50	21	59
中央館	平成2	68	47	68
	平成3	82	41	51

●授業参加が倍増—文献探索法ガイダンス

実施	平成2年度			平成3年度		
	回数	人数	授業	回数	人数	授業
4月	8	108	4組	25	394	10組
5月	23	226	11組	31	365	21組

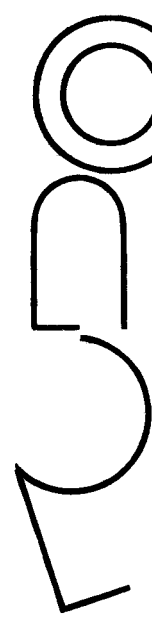
●平成3年度ガイダンスアンケートの感想から

学生の声

とても親切。ていねいな説明。わかりやすい。
 オンライン目録検索はとても便利。使い方がやっとわかった。
 本を探すのにカードやコンピュータを使う方法があるのは知らなかった。
 使い方がわからなくて四苦八苦していた。自分で見て回り、なければあきらめていた。
 もっと早い時期に受けていればよかった。1回生のときにしてほしい。4年では遅い。
 昨年度もゼミで受け、2回目なので一層よく分かった。
 図書館のネットワークに驚いた。書庫の蔵書の量にびっくりした。
 今まで図書館を十分に活用できていなかったと感じた。図書館を少し身近に感じた。
 平成元年以前もコンピュータで検索できるようにしてほしい。
 もっと多くの人に参加してもらって図書館を有効に利用できるようにしてほしい。
 オリエンテーション終了の単位はないのか。

教官の声

雑誌の検索がずいぶん便利になった。
 大変有益、学生達も生き生きしている、企画、実施の努力に敬意を表したい。
 学生のレディネスの違いがあり、オリエンテーションの段階を踏む必要性を感じた。
 後期開始時もこの企画があるとよい。毎年のことながら大変有意義な講習。



最近の館報にみる大学図書館の動向

守屋 勇夫

90年代の新しい波

岡山大学図書館の広報への取組みについては、前号の「楳」No.15、「図書館広報この三年」で紹介いたしました。われわれは89年から館報を機関誌として位置づけ、図書館が抱えている課題を毎号特集に組み、館長、部課長が自ら筆をとり、課題解決のため、研究者や大学管理者層に、理解と協力を求める努力を積み重ねてきました。

館報の位置付けについては、もちろん意見の違いはあろうかと思いますが、全国から送られてくる最近の大学図書館報をみると、この取組みが力づけられるような、新しい動向が感じられるように思われます。

これまで研究者のエッセイや見聞記、あるいは管理者の就任のあいさつなどが主だった巻頭記事や企画記事が、問題解決への提言記事へと、変化が見られるようになりました。このような印象を抱いている方は、決して少なくないのではないのでしょうか。

数年前、『大学図書館研究』第34号に、上田修一氏らによって、「大学図書館の将来像に関する意識調査」が発表されました。そのアンケート調査によりますと、大学図書館の管理者、館長経験者の意識は全般に保守的で、機械化の普及に関しては楽観的、その一方で研究者や学生への高度な情報提供サービスについてはかなり消極的であるとコメントされていました。

そして、大学図書館の将来について具体的なイメージを持ち、到達する目標を明確にして大学全体に示すことが、現状の問題点の解決をめざすうえで極めて重要であり、この点の論議が高まることが期待されていました。

館報の記事に見られる最近の新しい動きはこの要請に応えるかのように、館長、管理者が自ら、図書館の問題の分析、自己評価を行い、問題点と課題を明らかにし、取り組む姿勢を表明した記事が目立つことです。また、企画記事も、図書館側がどういう問題とどのように取り組んでいるかが、報告されるようになってきました。

これは、現在、全国共通の課題となっている大学図書館自己評価の先駆的な行動といえるのではないのでしょうか。

最近の記事から

そこで、このような新しい波動を伝える、主な記事を紹介してみたいと思います。

(巻頭記事)

東北大学 木這子 vol.15, no.3-4 1991.3
図書館の機能充実に向けて

矢野光雄 (事務部長)

付表：整備充実の実施経過と今後の課題
筑波大学 つくばね

vol.17 no.2 1991.9

附属図書館の課題の解決に向けて(その2)

松浦正 (事務部長)

vol.18 no.1 1992.6

平成4年度図書館事業計画について

松浦正 (事務部長)

(企画記事)

鹿児島大学 No.38 1991.7

図書館新築と大学の自治

坂口淳二 (事務部長)

鹿児島大学中央図書館施設設備の現状と当
面の改善対策

長津俊 (情報サービス課長)

長崎大学 No.54 1991.10

情報検索・相互協力サービスの充実を一附
属図書館 (本館) の研究図書館機能に関
するアンケートから一

近藤禎禎男 (事務部長)

筑波大学 つくばね vol.17 no.3 1992.1
電子図書館の実現に向けて

片野孝保 (情報システム課長)

附属図書館における図書館資料費と収書の
在り方 加藤宗晴 (情報管理課長)

(特集)

群馬大学 LINE 249/250 1992.3

特集 我が図書館を点検する

附属図書館運営委員会

名古屋大学 館燈 No.99~101 1990~1991
100号記念特集

- (1)名古屋大学図書館の歴史
- (2)館燈の歩み
- (3)21世紀の図書館ビジョン

大学図書館の自己評価に向けて

東北大学の特徴は、附属図書館商議会の協
議事項の資料として配布、審議され、承認を
得た付表が示されていることです。図書館が
自己評価に基づいて、改善の方針を具体的に
提示したものといえます。このマトリクス手
法による整備・充実計画表は、岡大図書館に
おいても東北大より先に、同じ矢野事務部長
により提唱され、図書館概要に掲げて実効を
あげています。

鹿児島大学の場合、学術情報資料センタ
ーとしての図書館の新築問題について、坂口
部長が「大学関係者は本当に、自分の責任と
自覚で大学の自治、学問の自由について考え
実践して来たのだろうか。言われている自己

点検、自己評価などを行って来ただろうか」
と、問題を投げかけられました。朝日新聞の
週刊誌アエラが取材し話題になりましたが、
その後、同誌で中央図書館の建て替えが実現
することになったと報道されました。

筑波大学では、平成3年度当初に各課ごと
に事業計画書が作成され、大小60件もの計画
が運営委員会に図られたことです。松浦部
長は、自己点検、評価のポイントをわかりや
すく、これでいいのか、まだ工夫の余地はな
いか、これでよかったのだろうか、さらに改
善の余地は、次の課題をどうするか、と表現
されています。

長崎大学の場合は、アンケート調査により
研究図書館機能を充実するための施策が検討
されています。

群馬大学は、全国に先駆けて、しかも図書
館運営委員会の名で自己評価を公表しまし
た。そのトップにあがっているのは図書館サ
ービスです。

サービスとは現状を打破し、新しいものを
育てる改革運動であり、それを生み出すエネ
ルギー、自己改革の力が内在しないと、サー
ビスは育たないと、かつて筑波大学の今村慶
之助事務部長が、館報の「つくばね」(vol.14
no.3 1988.12)で指摘されています。

今、大学における自己点検、自己評価が大
きく叫ばれ、図書館に関しては、今年の6月
の国立大学図書館協議会総会において、標準
的な評価のポイント等に関し、研究するため
の委員会の発足をみえています。

しかし、すでに、大学図書館では、上記の
ように、その動きは胎動を初めており、個々
の図書館の事情に対応しながら真剣に取り組
まれていることを知る事ができます。

そして、それがほかならぬ館報によって広
報されるようになったことは、館報が図書館
の機関誌として脱皮、成長しつつあることを
示すものといえるのではないのでしょうか。

(もりや・いさお 附属図書館専門員)



大学図書館の自己評価の方法をめぐって

山中 康行

はじめに

今年度の課題としてクローズアップされてきた大学図書館の自己点検、自己評価は、基本的には大学の教育・研究支援の機関として果たすべき資料の収集・組織化・提供という機能をどこまで達成しているかを検証し、今後の課題と方針を明らかにすることにあると考えられます。

図書館の自己点検・評価をめぐる大学図書館界の動向については、守屋専門員がレポートしているので、ここでは、自己評価の方法に関するトピックを最近の文献から紹介してみたいと思います。

1 図書館運営計画のプロセスとして

評価を図書館運営計画の一部として位置付け、定期的に継続して行っている数少ない例として、『筑波大学年次報告書』の「附属図書館」の章、『岡山大学附属図書館概要』の「整備・充実計画」の章などがあります。

いうまでもなく、大学図書館の存在意義を高めるためには、運営方針の確立が肝要ですが、図書館運営計画の中で最も重要なプロセスは目標の設定であると言われています。

図書館運営計画は、一般に、将来の達成目標を設定し、そのための具体的方策を検討して実施に移し、その達成度を測定する方法や手段を検討したうえで、測定した結果を吟味して評価をくだし、次期の目標を設定するというプロセスで行われます。

本学では、測定の方法は、主として年度ごとの文部省学術情報課による『大学図書館実態調査結果報告書』、日本図書館協会の『日本の図書館』の統計によっています。

2 効果的なサービスを測定する評価法

岩猿敏生ほか『大学図書館の管理と運営』(1992.4)の「大学図書館の評価」によると、評価の方法として、Lancasterの①効果、②対費用効果、③対費用便益の3種類が挙げられ、日本では①の方法が適切であり、これはサービスが利用者の要求をどのくらい満足させているかが要件となっています。しかし、特定文献の入手状況の評価をとっても、利用者、蔵書、目録、施設と資料、職員とさまざまな要素が複雑にからみあっており、総合的な大学図書館評価は不可能にちかといえませんが、評価法が比較的確立しているのは次の3領域とされています。

蔵書一統計法 観察法 書誌や目録との照合法

資料の利用—利用者調査 利用調査 入手可能性調査

レファレンスサービス—質問総計法 回答率測定法 正解率測定法 アンケート調査法

3 パフォーマンス尺度について

英米の大学図書館で重要なトピックとなっているパフォーマンス尺度を紹介、コメントした最近の論文として、①上田修一(慶応大学)「大学図書館のパフォーマンス」(『大学図書館研究』第38号)と、②糸賀雅児「図書館活動の評価に関わる標準化」(『情報の科学と技術』(Vol.42 No.9)があります。

糸賀氏によると、パフォーマンス測定は、パフォーマンス尺度とパフォーマンス指標を含んだ概念で、尺度は、活動を直接、数量的に表現するもの、指標は、活動と関連すると考えられる要因を測定するものという説明が

なされています。つまりパフォーマンス尺度は、組織体をもつ目標を達成しそのシステムの利用者のニーズに答える能力を数量的に示したものと定義されています。そして、具体的な大学図書館のパフォーマンス尺度として、ACRL (Association of College and Research Libraries)のマニュアルが紹介されていますが、尺度は、「利用者の全体的満足度、資料の入手可能性と利用、施設の利用、情報サービス」に大別され、上田氏によると、これらがさらに15種類の項目に分類され、定義、データ収集、分析が示されています。

そして、評価は、マクロとミクロ、定量的、定性的側面があること、マクロで定量的な評価には、日常業務の一環として作成される業務統計(図書館統計)が用いられますが、ミクロで定量的な評価には特別な調査による統計データが必要で、パフォーマンス評価のためにはこれが必要であるとされています。筑波大学図書館報の「本学図書館(筑波キャンパス)の利用状況」(富江伸治、つくばね vol.16 no.2 1990.9)は、いうならばこのパフォーマンス尺度の観点からなされたサービスの測定といえます。学内プロジェクト研究費により、図書館計画研究のための事例研究として行われた調査結果の報告です。

大学図書館の業務統計としては文部省の大学図書館実態調査結果報告など共通の標準的指標による統計データがありますが、上田氏は、従来の利用統計は日常業務として収集され、報告のための材料として使われる傾向が強い、しかしパフォーマンス尺度は、利用調査を戦略的な観点から、サービスの効果を判定し、業務の改善案を策定するために測定されることを強調しています。しかし、それには管理者をはじめ図書館員全体に運営に対する意識変革を求めることになり、またデータ収集の負担増加など、日本の大学図書館への導入の可能性には否定的です。

この点、先の筑波大学のように、研究者に

よる調査研究は、ひとつの望ましいあり方を示すものといえるでしょう。

4 大学を取り巻く新たな状況

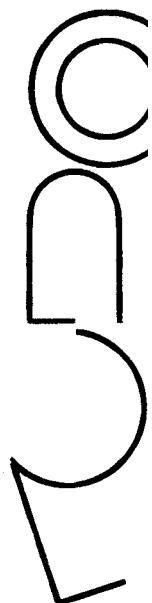
本学では、「岡山大学における自己点検・評価に関する要項(平成4年1月22日評議会決定)」第1条で、本学の教育研究水準の向上に資するために行うものと規定され、学術情報の項目で図書館の整備充実が対象とされ、大学全体の中で組織的に検討されることになりました。

図書館は成長する有機体であるといわれますが、①図書館の規模と複雑さの増大、②利用度の要求の高度化、③学術文献の増大と資料の高騰・財政の圧迫、④定員削減、⑤メディアの多様化、⑥技術革新に伴う機械化等々の今日の状況のもとでは、今後は利用者の満足度の観点からの自己点検・評価がクローズアップされるものと思われます。

また、平成3年12月臨時行政改革推進審議会の「豊かなくらし部会」は、地方分権推進の具体策の一つとして、地方国立大学を自治体へ移管する可能性を検討するよう政府に答申しています。時代の要請や地域の特性に応じた学部・学科の創設ないし転換を、自治体指導で行うようにとの主旨です。この答申がただちに実施に移される状態とは思われませんが、地方国立大学の将来像に一石を投じたことは事実で、看過できない大きな問題提起であると思われます。

全国97の国立大学はそれぞれ、機構組織、施設、立地条件、蔵書、予算、職員数、サービス内容等に独自の要素が多く、それぞれの自己点検・評価の視点は、各大学の将来計画にもかかわるでしょう。しかし、現時点で、何がどうなされたか、課題は何かの追求は、避けては通れません。課題の解決には、何よりも明快な具体案と実行組織・行動力とが必要であると思います。

(やまなか・やすゆき 情報サービス課長)



ERIC・CD-ROMの利用

田中賢二

1 ERIC

教育分野のデータベースのうち世界最大のもの（1990年12月現在でデータ数約72万8千）が、アメリカのERIC（Educational Resources Information Center：教育資源情報センター）である。

「ERICは、教育文献を容易に検索できるようにした全米的な情報ネットワークである。一つの情報源から教育研究や教育実践の情報を得ることができるように、1966年に作られた。ERICは地域や州、連邦および国際的機関から情報を収集し、それを分析したり、提供したりしている。ERICシステムは米国教育省のOERI（教育研究振興局）によって運営されている」。

データベースの良し悪しは、そのデータの精度やデータ数だけでなく、検索に使用するキーワードの保守・管理できまる。キーワードの選定・定義及び解説・分類・関連づけ、そして、登録開始年月・使用回数などが記録され、更新されていかなければならない。このシソーラス（類語・関連語辞典 Houston, James E. (Editor), "Thesaurus of ERIC Descriptors", Oryx Press 1990) の完備が、ERICの特徴である。文献の検索を効果的に進めるだけのもではなく、教育分野の体系や変遷さえも窺い知るのに使いうるものである。

2 ERIC・CD-ROM

ERICのデータは報告書（RIE：Resources in Education）と雑誌論文（CIJE：Current Index to Journals in Education）とに分かれていて、書誌項目は、若干異なる。また、ERICを取り扱う業者やその媒体（冊子、オンライン、CD-ROM）によっても、検索項目

が、若干異なる。例えば、文献データの項目は、受入番号・著者名・題目・出版機関・雑誌の巻号頁・資金援助機関・補助金番号・出版年・入手先・注記・値段・文献タイプ・出版地・対象読者層・言語・出版機関の行政レベル・頁数・キーワード・要旨・入手可能性などであり、そのうちいくつかはコード化されて入力されている。

表 ERIC・CD-ROMからの出力例

```
AN: EJ394270
CUM: S5544991
AU: Dauge, Donald R.; Esory, Thomas P.
TI: Teaching Teachers: Scientific Literacy.
PY: 1989
JN: Science-and-Children: v26 n8 p30-31 May 1989
JVS: UM1
DT: Journal Articles (080); Reports - Descriptive (141)
TA: Teachers; Practitioners
LA: English
DE: College-Science; Educational-Improvement; Evaluation-Methods;
Science-Education; Technology-
DE: *Elementary-School-Science; *Higher-Education;
*Preservice-Teacher-Education; *Science-and-Society;
*Science-Teachers; *Scientific-Literacy
IS: CIJDFCB9
AB: Described is a science, technology, and society (STS) segment of an
elementary science methods course for preservice science teachers.
An outline of a typical STS investigation is presented. Evaluation
of this segment of the methods course is discussed. (CW)
GN: SE
FI: EJ
DTN: 080: 141
```

シソーラスや手引きなしでは、データの内容は理解できないし、また、検索で探そうとする文献はどのような範囲で、どのような性格であるのかが解らない。必要なデータを入力するまで、多くの時間を掛けることになる。この試行錯誤を時間的にも経済的にも許してくれるものが、CD-ROMである。ただ、オンラインに比べて、最新データに近づけないこと（タイムラグ）が難点である。しかし、CD-ROMからは、必要なデータを自分のフロッピー・ディスクに容易に落とし、自分のミニデータベースを作ることができる。これは、ROM（Read Only Memory）を書き込み可能なもの（file）に変え、自分なりにデータを加工できるようにしたことである。入力されていないデータを加えたり、不必要な部分を削除したり、略記やコードを解るように変換したりできる。

3 利用例—検索から分析へ

要旨を手がかりにして文献の概要を知り、原文の入手の必要性を判断する。しかし、新しい研究テーマであったり、研究分野が学際的であったりすれば、また、研究を始めようとする大学院生などにとっては、まず、研究の範囲や動向を意識的に把握しなければ、この判断が妥当なものにならない。そして、どのような研究成果があり、どのような報告書・雑誌に公表されているのか、どのような研究が求められているのかなどが分かって、これからの研究が、先行研究群とは違うそのオリジナリティを主張できるのである。

研究が特殊化すればするほど、全体の中での位置付けが研究対象として分化する。そして、ある分野の研究の動向や特徴を明らかにすること自体が、一つの研究になってくる。科学史と科学社会学の視点からは、科学技術の発展の特性や推移を明らかにする目的で、記録された成果である雑誌論文や特許などを計量的に分析する試みがあり、Statistical Bibliography / Bibliometrics / Scientometrics などという用語が使われてきている。

ERIC・CD-ROMを使って、既に、筆者らは、理科教育学の立場から、理科教育において話題に騰っているSTS (Science, Technology and Society) の実態と研究動向を、また、コンピュータ教育の研究動向などを明らかにしてきた。ここでは、ERICデータベースから得られた物理教育文献の分析結果を、いくつかの図を転載する形で、示しておく。

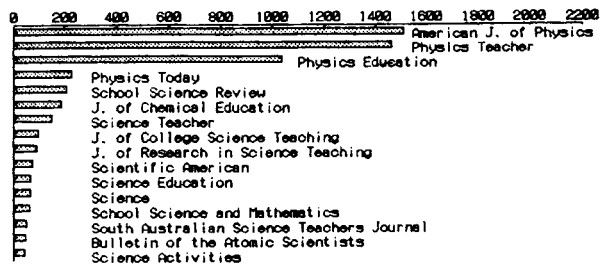


図 物理教育のコア・ジャーナル(ベスト16)

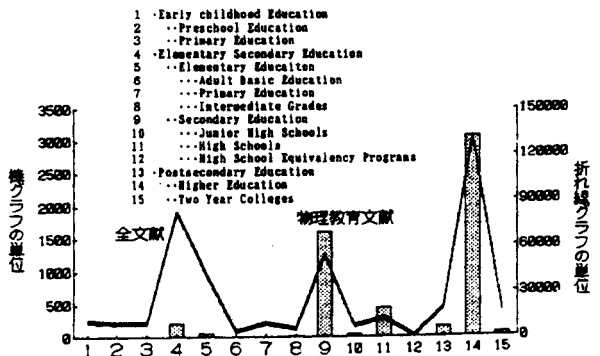


図 物理教育研究で対象となった教育段階

詳しくは、また、分析方法や考察などについては、下記の論文を参照されたい。

* 田中賢二・柿原聖治；アメリカにおけるSTSの実態と研究動向——ERICデータベースの文献分析を通して——、日本理科教育学会研究紀要，31巻1号(1991)，1-11

* 田中賢二・柿原聖治；アメリカのコンピュータ教育(Ⅱ)——ERICデータベースの文献分析を通して——、日本科学教育学会年会論文集，15巻(1991)，481-484

* 田中賢二；アメリカにおける物理教育の研究動向——ERICデータベースの文献分析を通して——、日本物理教育学会・物理教育，39巻4号(1991)，243-246

尚、筆者らは、更に定期・不定期刊行物データベースUlrichをも使い、つまり、ERIC・CD-ROMとUlrich・CD-ROMとを利用して、教育分野の専門雑誌の分析を進め、次の研究成果も公表している。

* 田中賢二・柿原聖治；アメリカのコンピュータ教育(Ⅲ)——データベースERICとUlrichに基づく関連雑誌の分析——、日本科学教育学会・年会論文集，16巻(1992)、F234

* 田中賢二・柿原聖治；アメリカの地学教育雑誌の分析——データベースERICとUlrichに基づいて——、日本科学教育学会・科学教育研究、(印刷中)

(たなか・けんじ 教育学部助教)

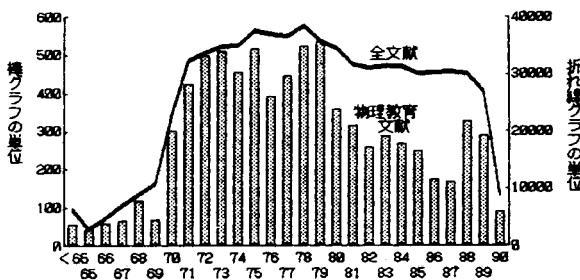


図 公表年による変遷：全文献と物理教育文献

マイクロコンバージョンセンターから

—マイクロ版 全国へ海外へ—

白石 信雄

1 「共同事業」の成果

国立国会図書館所蔵「明治期刊行図書」に始まり、今回の「池田家文庫」、そして東北大学所蔵「狩野文庫」に続く一連のマイクロ化事業の特徴は、それぞれが刊本として、古文書として、写本として、我国はもとより世界的にも最大規模のもの、という点にあると考えています。

マイクロフィルムという安定した媒体によって、半永久的な資料保存が可能になるという評価が定まりつつある一方で、我国では、とりわけ大学図書館という資料の永久保存を任務とする研究図書館において、プリザベーションの予算化がなかなか進まない隘路を、私たちは資料保存事業と出版事業を何とか両立させたい、両立させてみせるという力業を發揮することで、徐々に突破しつつあるといえるでしょう。

しかしこの種のマイクロ化事業成功の最大の要因は、何といたってもそれが大学図書館と企業の「共同事業」化のレベル如何に関わっていることを、私たちはこの仕事を通して痛感させられています。

共有させるべきポイントは、私の独断によれば、(1)撮影対象のすべては読まれるものである、(2)時間はコストである、の2点です。

図書館所蔵のすべては読まれることを想定しているはずですが（私は今は亡きフランスの哲学者が戦前に書いた小説の中に、図書館の本をアルファベット順に頭からすべて読破しようとしている独学者を登場させていることを卒然と思い出しています）、時間の尺度は恐らく5年、10年、100年単位ではないかと思われまふ。しかるにマイクロ化事業と

は、比喩的にいうならば、〈年単位〉の図書館の時間の中に〈月単位〉の企業の時間が持込まれ、期限つきで（私たちは撮影期間を〈月単位〉で表示することに固執しています）対象資料のすべてが読まれることを前提に、一点、一点、精査することです。

その結果、今回の「池田家文庫藩政史料」マイクロ化事業は、図書館関係者の驚嘆すべき専門職能の發揮によって、目録再構築作業に到達、共同作業レベルにおいて真に利用者の評価に応え得る内容を有するに至ったといえるでしょう。

2 内外の評価

果たせるかな公刊された改訂増補版目録の「総記」「国事維新」に対し、国際日本文化研究センターの笠谷和比古助教授は、

- (1)個々の史料の性格を丹念に検討し、分散化した諸史料の内的関連性を把握すべく多大な労力が費やされた結果、諸史料の原秩序の復元、作成者（作成部局）の確定への努力がなされている。
- (2)ともすれば内容分類によって分散されがちな一件文書の史料群について、その存在形態そのものにも史料成立に関わる貴重な情報が含まれているとして、原形復元に多くの労力が割かれている。

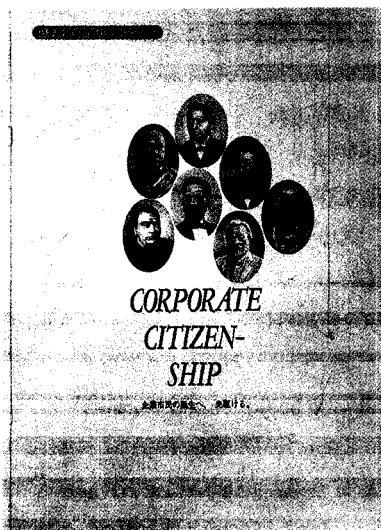
と指摘しつつ、「これらは文書史料の取り扱い、目録作成についての高い見識を示すものであり、深く敬意を表するものである」とのコメントを寄せられました。

また私たちはマイクロ版集成の第一期、第二期完成に伴い、全国の主要な近世研究者を経めぐり、利用促進への評価を丹念に収集し

つつその一部を商品カタログ上に掲載していますが、さらに海外の関心を喚起すべく、John W. Hall イエール大学名誉教授を祖とするアメリカの近世研究者にもアプローチを開始しました。

石田寛広島大学名誉教授のご紹介を得て、8月中旬に京都に赴任されたConrad Totman イエール大学教授に、マイクロ化事業の完成間近を報告すると、早速「Congratulations to Maruzen for undertaking the microfilming of the Ikeda Family Archives. It is a fine accomplishment.」というご返事を頂戴しました。その上、京都でならいつでも来てよろしいとお言葉に甘え、さる9月4日、南禅寺近くの、京都日本研究センターを訪問したのでした。

Totman 教授は「私はジョン・ホール先生の弟子の一人」と流暢な日本語で前置きした上で、私たちの求めに応じ「池田家文庫マイクロ版集成」に関心をもつであろう、D. Shively (U. of Calif. Berkeley)、H. Bolitho (Harvard U.)、P. Brown (Ohio State U.)、J. McClain (Brown U.) 以下のアメリカの13大学、20数人に及ぶ研究者名一覧を、記憶を辿りつつ、また分厚い英文の論文集を繙きつつ作ってくれました。



日本研究文献海外寄贈プログラム用のパンフレット(丸善)

また私たちが進めている「明治期刊本マイクロ版集成海外寄贈プログラム」を知るに及んで、教授はこの池田家文庫がアメリカのしかるべき大学に（自分を含め3名の近世研究者を擁するイエール大学こそが最適の機関だとコメントすることを忘れずに）寄贈されるためなら、自分としては出来る限り日本企業のスポンサーシップ喚起のための努力は惜しまないと力説されました。

3 海外寄贈プログラムの第2弾として

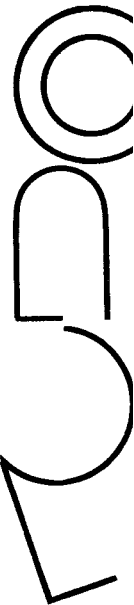
9月5日朝日新聞夕刊は「学術・文化に不況風」と題し、三井海上と日興証券が昨年3月、国立国会図書館所蔵明治期刊本マイクロ版をケンブリッジ大学とハーバード大学に寄贈したが「先の二社に続く企業はまだ現れていない」と、私たちの寄贈プログラムを同情的に紹介しています。

海外の日本研究者を支援することが、日本理解促進の基礎になるという理念に発する私たちの日本研究文献海外寄贈プログラムは、好不況にかかわらず、もともと企業の理解を得るのに時間がかかるであろうことは承知の上です。しかし経済活動の国際化、現地化を不可避とする企業関係者が、短期的な見返りを期待しない文化貢献をせざるを得ないと考えだしていることも事実です。

明治期刊本に継いで池田家文庫がメニューに加わることで、寄贈プログラムの選択の幅が拡がり、いつの日か必ず、池田家文庫にもスポンサーが現れるものと期待を失わずに、私たちは根気強く企業の扉を叩いて参りたいと考えています。

池田家文庫というかけがえのない文化遺産のマイクロ化事業を通して、マイクロコンバージョンセンターが、全国の研究者、さらに海外の研究者に向けた情報発信基地となる手ごたえこそが、完成間近の仕事を進める私たちの励みとなっています。

(しらいしのおお 丸善ニューメディア部次長)





パソコンによる利用案内システム公開

『楷』No.14 (1991.10) の特集記事「利用者指導を考える」で、利用者案内のシステム化の計画(仮称 OULIS: Okayama Univ. Lib. Information System)を紹介しました。これは特に今年度から週休2日制が施行されることもあり、ユーザのセルフレファレンスの補助手段として、文字情報はもとより音やカラーのイラストなどを用いた、パソコン版の図書館案内の開発を企画したものです。

幸い、平成3年度、学内の理解を得て、マッキントッシュ II ci 2 台を購入できたので、館内にプロジェクトチーム「インフォメーションシステム開発委員会」を組織し、メニューの開発に取り組んできました。

9月11日から1階フロアでユーザに公開していますが、約15分間の最も基本的な図書館案内情報を、映像とともに日本語と英語でエンドレス方式で提供しています。今後は、メニュー選択方式によって、利用の仕方についての各種の情報をスピーディに得られるように、工夫を重ね創作していく予定です。

ご意見、ご感想をお待ちしています。

完成近い池田家文庫マイクロ化事業

この度、丸善から第1期分に引き続き、第2期分フィルムを受贈し、9月から利用サービスに供されています。第2期分は、領地27リール、宗教67リール、藩士556リール、合計650リールです。第3期分、第4期分を加えた全体では、約2,480リールになる予定です。

CD-ROMセミナー 好評

—鹿田分館—

鹿田分館では、MEDLINE及び医学中央雑誌のCD-ROM版の利用サービスを提供していますが、平成3年度のユーザは延べ2,047人に達し、パソコン1台のためやむなく利用時間は1回30分という制限を設けています。幸い、学内の理解を得て、今年度パソコンの増設が認められましたので、この点は緩和される見通しです。

CD-ROMセミナーもすっかり定着し、今年度4～8月に15回のセミナーを開催、また教室単位の特別セミナーも数回実施し、多数の参加がありました。ユーザが各自のテーマについて実習し、シソーラスや副標目の使い方、検索戦略の立て方を学習できるよう配慮しており、好評です。

平成3年度大型コレクションを購入

—国際機関の統計書類—

これは、国際連合、国際通貨基金など各種の国際機関が刊行した産業、金融、労働などの経済統計及び社会統計とそれに関連する委員会報告、議事録などのコレクションです。主なものは次のとおりです。

- Statistical year-book of the League of Nations.
1926-1942/44
- Statistical yearbook (United Nations).
1948-1985
- Yearbook of fishery statistics. (FAO)
vol. 1-53 (1947-1981)

サーチャーとのインタビューに重点を — 代行検索サービス —

本誌の「参考調査業務の新しい展開」でも紹介していますが、中央館では、JICSTやDI-ALOGの提供するDBを呼び出し、文献情報の代行検索サービスを行っています。教官の研究費による利用のみですが、受付時間は、月～金曜日の9:00～11:00、13:00～16:00、電話で予約をお願いしています。

平成3年度の利用は235件、自然科学系のファイルの利用が圧倒的に多く、化学系37%と工学系23%で過半を占めています。ユーザーは工学部がトップで28%を占めています

平成3年1月から、申し込み用紙を改善し、キーワードの選択、検索式など内容に関するインタビューに重点を置き、ユーザーの満足度を高める検索を心がけています。高度の専門的内容の理解はサーチャーには難しい点もありますが、検索効果を高めるために、煩をいとわずサーチャーへ内容を伝える努力をお願いいたします。

会議 〇〇

◆ 学 外

- 4.16～4.17 中国四国地区大学図書館協議会総会(於愛媛大学)
- 4.17 国立大学図書館協議会中国四国地区協議会(於愛媛大学)
 - ・第39回国立大学図書館協議会総会での分科会に中国四国地区として提出する協議題について
 - ・図書館における自己点検・評価について
 - ・図書館と情報処理センター等との役割等について
 - ・週40時間勤務制への対応について
- 5.15 岡山県図書館協会理事会(於岡山県総合文化センター)
- 5.25 国立大学附属図書館事務部課長会議(於東京医科歯科大学)

開館時間数は現状を維持 — 週休2日制の実施 —

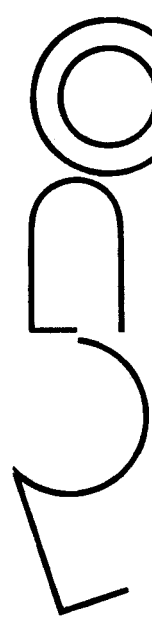
中央館では従来、休業期を除き、土曜、日曜開館を実施し、この1年間は水曜日の時間外延長など、開館日数は全国的に高い水準にあります。週休2日制に伴う開館時間については、これまでの休館日を勘案し、開館日数の維持を図りました。鹿田分館では日曜日は閉館になりました。

『農業生物研究所史』を出版

— 資 生 研 —

大正3年創立の財団法人大原奨農会農業研究所が昭和26～27年に岡山大学に移管されるまでの歴史は『大原農業研究所史』に著されていますが、この度、移管後から昭和63年改組までの、岡山大学附属農業生物研究所37年の歩みと研究成果の記録を納めた本書が刊行されました。附属図書館資生研分館については、第6章に記載されてあります。

- 5.28～5.29 第63回日本医学図書館協会総会(於九州歯科大学)
- 6.15 平成4年度岡山県図書館協会総会(於岡山県総合文化センター)
- 6.25～6.26 第39回国立大学図書館協議会総会(於帯広畜産大学)
 - ・奈良先端科学技術大学院大学の加盟について
 - ・完全週休二日制への対応について
 - ・保存図書館の設置について
- 10.8～10.9 平成4年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会(於高知大学)
- 10.28～10.30 第33回中国四国地区大学図書館研究会(於山口大学)



◆ 学 内

- 4.15 平成4年度第1回図書資料(大型コレクション)収書計画に関する小委員会
- 4.24 第1回附属図書館運営委員会
 - ・附属図書館各種小委員会の所属について
 - ・完全週休2日制の実施に伴う図書館の開館について
- 4.27 第1回池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会
 - ・目録照合整理作業について、その他
- 6.9 第2回附属図書館運営委員会
 - ・岡山大学附属図書館利用規程の改正(案)について
 - ・平成4年度図書館資料購入費配当予算額(案)について
- 6.11 第1回附属図書館広報委員会
 - ・平成4年度の活動方針について
 - ・館報「楳」No.16の編集について
- 6.25 第2回附属図書館広報委員会
 - ・平成4年度の活動方針について
 - ・館報「楳」No.16の編集について
- 6.30 平成4年度第1回鹿田分館運営委員会
 - ・平成3年度分館運営費及び複写室運営費決算について
 - ・平成5年度分館購入外国雑誌の見直しについて
- 7.8 第3回附属図書館広報委員会
 - ・館報「楳」No.16の編集について、その他
- 7.10 第2回池田家文庫マイクロ化実務打合わせ会
- 7.30 平成4年度第2回鹿田分館運営委員会
 - ・平成4年度分館運営費及び複写室経費の予算について
 - ・平成5年度分館購入外国雑誌の見直し第2回アンケートの結果について
- 8.3 第1回インフォメーションシステム開発委員会
- 8.21 第2回インフォメーションシステム開発委員会
- 9.21 第1回附属図書館電算機仕様策定委員会
 - ・図書館専用電算機の更新に伴う機器構成について
- 9.30 第3回インフォメーションシステム開発委員会
- 10.8 平成4年度特別図書選定小委員会
平成4年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」(人文・社会科学系)選定小委員会
平成4年度附属図書館中央館備付「全学共用図書」(自然科学系)選定小委員会
- 10.21 第4回附属図書館広報委員会

研修 ㊦

- ・平成4年度大学図書館職員長期研修
参加者 古中秀子(7.13~7.31)
- ・第19回医学図書館員セミナー
参加者 大元利彦(7.30~7.31)
- ・第12回 JST(基本コース)研修
参加者 丸尾進洋 藤井健司(9.8~9.11)

編集委から㊦

夏はオリンピック、秋はエンデバーの宇宙飛行と、ホットな情報が地球を駆けめぐりました。

本誌のデザインの変化、お気づきでしょうか。衣替えです。大学図書館広報誌のフォルムを追い求める清水國夫教授のデザイン提言です。

本号では、大学図書館の自己評価をテーマに取り上げました。図書館という言葉は今の図書館を表現するには現実的でないとの発言もあります。

大学図書館はどんな未来をもつべきなのでしょう。梅棹民博館長は『情報管理論』の中で、「学術情報源として重要なのは非図書資料である」と言っています。考えさせられる発言です。

平成2年度に始まった池田家文庫マイクロ化事業もまもなく完成します。紙の古文書がマイクロに変換され、新たな媒体で学術情報源として流通を始めます。(中野)

岡山大学附属図書館報「楳」 No.16 平成4年10月27日
発行人 森岡祐二 編集 広報委員会 表紙デザイン・レイアウト 清水國夫
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話086-252-1111